
Ring of Fortune

曲楽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R i n g o f F o r t u n e

【Nコード】

N 7 8 7 8 Y

【作者名】

曲楽

【あらすじ】

自分の望む世界を映し出す鏡。
わたしの望む世界ってなんだろう。
期待に胸を膨らませながら、わたしはその鏡の中に一步を踏み出した。

「ようこそ、ミルス・クレア魔法院へ。」
幸運を導く指輪と共に。

（ワンドオブフォーチュンの二次創作です。）

一度二次創作を書いてみたいという思いと、ワンドへの強すぎる愛でやってしまいました。

文才0の作者がはじめて書く二次創作です。

主人公であるオリキャラが、ワンドの世界をメチャクチャにする可能性があります。

また、作者はワンドの世界の魔法の仕組みとか、あまりよくわかっていない可能性があります。

しかも、原作うる覚えなのに確認もせず無理矢理書きすすめる場合もあります。

イメージが崩れるのが嫌な方は、今すぐお戻りください。

無印、FD、2のネタバレいっぱいです。ご注意ください。

ちなみに、作者はアルバロを愛しています。エストとソロも大好きです。たぶん贋します。ごめんなさい。

以上の点が大丈夫だという方のみ、どうぞお読みください。
(

退屈な世界から抜け出す鏡

「爆発すればいいのに。」

「なにが？」

「学校。」

「は。」

「だって暇なんだもん。」

暇。

暇だ、本当に。

退屈すぎる。

いつそ、学校でも爆発すればいいのに。

・・・自分から仕掛ける気にはなれないけど。

「閉鎖空間に行きたい・・・神人でも出てきてこんな学校壊してくれればいいのに・・・。」

「ちょ、絵有^{えあり}？」

「SOS団に入りたい・・・わたし、異世界人として乗り込むわ！」

！

「あー・・・最近またハルヒ読んだでしょ？」

「んー・・・まあ・・・星奏学院でトロンボーン吹いてくる・・・」

・・・

「ええと・・・それはなんの話？」

「黒主学園に転入したいー。川中島の戦いで道鬼斎につかまってるー。」

「ちよつと待つて、ついていけない。なんの話??」

「彩江^{あやえ}ちゃん知らないと思うよ。少女マンガとか女性向けゲームとか興味ないでしょ。」

どこかへ行きたい。

もっと楽しいところ。

もっと楽しい世界。

ここじゃない世界。

非現実的な世界。

「うん。……ていうか、二次元に依存しすぎじゃない？」

「いいの。……彩江ちゃん、部活は？」

「それはこっちのセリフなんだけど。文芸部は今日休み。」

「あー……。いいよねえ、お休みいっぱい。わたしも文芸部に転部しようかなあ。……そのうちSOS団になるかもしれないし。」

「いや、ならないから。ていうか絵有、ほんと部活いいの？」

「んー……。やめちゃおっかなあ、吹奏楽。」

「えええええ」

「だって、ほとんど休まないし。土日も祝日も一日練習だし。平日だって8時から朝練で、授業終わったら夜の8時まで練習あるし。

やりたいこと全然できないっていうか、そこまでしてトロンボーン吹きたくないっていうか、先生はかなり厳しいけどそれももう飽きたっていうか……。」

「先生の厳しさが飽きたってなんなの。」

「いや、なんかもう怖くなくなっちゃったっていうか、あーはいはい、とは思えないんだよね。怒られても。」

「絵有……。」

飽きた。

飽きた飽きた飽きた。

部活も、この学校も。

退屈。

ほんとに退屈。

「こんなところでさぼってる時点でもう退部決定だよ。先生厳しいし。部長さんも厳しいし。」

「いやいやいやいや、なに言ってるの。」

「あー……。そろそろ教室から出ていくべきかな。週番さん困ってる。」

「……。ほんとだ。鍵閉めたいっぱいね。」

「うん。行こう。ごめん、話につきあわせて。」

「べつにわたしはいいけど、・・・部活、本気で行かないの？」

「わかんない。・・・どうしよう。」

わたしたちは教室から出て、廊下からずっとこちらの様子を窺っていたらしい週番さんに謝る。

「そうだ、彩江ちゃん。わたし、あの鏡に行ってくるよ。」

「あの鏡？なにそれ。どの鏡。」

「このまえ貸してくれた部詩に書いてあったじゃん。たしか、一昨年くらいのやつ。」

「あー・・・教育塔の2階から3階にあがる階段の踊り場の鏡？」

「そう。それ。」

一昨年の3年生の文芸部員が書いた小説にあった。
その鏡は、自分の望む世界を映し出す。

「あの小説、なかなかメチャクチャな設定だったよね。・・・たしか、主人公はその鏡から異世界に行っちゃうっていうファンタジーものだったよね？」

「そう。わたしもちょうくらファンタジーな異世界に行ってくるよ。」

「えええつ、部活はどうするの。」

「そのあと考える。・・・彩江ちゃん、そろそろバスの時間でしょ。」

「あ、ほんと。じゃあ、わたし行くわ。・・・部活、ちゃんと行きなよ？」

「えー・・・怒られる・・・。」

「行きなよ!？」

「・・・気が向いたらね。」

わたしの望む世界ってなんだろう。

・・・二次元の中だったら、どの世界が一番いいだろうか。

「やっぱり、今のマイブームはあれよね。」

中学時代の友だちが貸してくれて、すっかりはまってしまった。どうしても自分用が欲しくて買い、FDも買い、最近発売された新作も買ってしまった。

女性向け恋愛シミュレーションゲーム。

「ミルス・クレアに入学したい……。」

本当に好きだ。

愛してしまっている。

「アルバロが好きだ。禿げる禿げるー。」

大好き。性格最悪な彼が。

現実にはいたらほんとありえないと思うけど、二次元なら許せる。本当に大好き。何度殺されかかっても、……実際に殺されても、それでも好きだ。

「……廊下歩いてる途中に顧問の先生に会ったらどうしよう。」

途中まで歩いてきて気づいた。

そういえば、教育塔の階段に行くまでにはどうしても職員室の前を通る。

「……大丈夫だね。きっと部活のほうに行ってるよね。」

とはいっても不安だ。

職員室は教育塔の1階。

わたしは教育塔に入り、廊下に誰もいないことを確認すると、そのままダッシュした。

そして階段を駆け上る。

「……着いたっ……。」

ダメだ。疲れた。

自分、体力なさすぎる。

さすが、十段階評価で体育に3を貰っているだけはある。

「……はあっ、これが、例の鏡。」

自分の望む世界なんて、映っているはずない。

そんなことわかっていた。

移動教室とかで何度もこの鏡の前を通ったことはあるが、いつ見てもこの鏡は普通の鏡だった。

あたりまえだ。所詮、生徒が書いた小説の中の話にすぎないのだから。

・・・そのはず、だったのだが・・・。

「あれ・・・こんな鏡だったわけ・・・。」

どこの学校にでもあるような、普通の鏡。

なんの装飾もされていない、等身大のただ鏡・・・だったはず。

「こんな鏡・・・じゃない。」

そこにあつたのは、まるで学校の風景に合わない鏡。

独特な雰囲気を持った鏡。

「でも・・・この鏡、見覚えがある。」

こんな鏡、違う。

でも、見覚えはある。

「新聞部の部室・・・？違う、食堂・・・・・・・・え・・・。」

ありえない。

でも、たしかこんな鏡だった。

「うそ・・・でしょ。」

わたしはそつと鏡に触れようとした。

「・・・・・・・・！？」

触れられない。

鏡の表面の、冷たい光沢は見えているのに。

その表面を手で触れることができない。

「これ・・・入れるってこと・・・？鏡の中に・・・・・・・・？」

鏡の表面に触れようとした手は、なにに触れることもなく、すつと鏡の中に溶ける。

・・・・・・・・なにかの怪談のようだ。

でも、すごく面白い。

「入るしかないでしょう。」

入るしかない。

こんな非現実的なこと、見逃してどうする。

わたしはずっと、それを待っていたのだから。

「どこへ・・・つながっているのかな。」

わからない。

でも、すごく楽しみだ。

「わたしの望む世界？・・・本当に？」

入ってみなければわからない。

だから、入ろう。

「・・・きつと、帰ってこれるわよね。・・・べつに、帰って

これなくてもいいか。」

そこが、本当にわたしの望む世界なら。

そしてわたしは、その世界に一步を踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7878y/>

Ring of Fortune

2011年11月23日14時57分発行